

献辞

経済学部での研究・教育に長きにわたってご尽力いただいた黒田彰三教授が定年を迎えられ、2017（平成29）年3月末をもって専修大学を退職されることとなりました。私たち経済学部スタッフ一同は、これまでのご功績に対して『専修経済学論集』第51巻第3号を「黒田彰三教授退職記念号」として呈上し、衷心より感謝の意を表したいと思えます。

黒田彰三教授は、愛媛大学文理学部卒業、専修大学大学院経済学研究科博士課程単位取得退学後、1972（昭和47）年4月に専修大学経済学部助手として入職され、その後、同専任講師、同助教授を経て、1992年（平成4年）4月に経済学部教授に昇格されました。

黒田教授は、経済地理学会、地域地理学会に所属され、英国および日本の都市計画（Town Planning）を中心テーマとする研究を進めてこられました。とりわけ英国での留学経験は、「道路」等々の社会資本整備等を中心とする都市形成、あるいは、「市場メカニズム」および巨額資金を通じた土木工事による都市形成というイメージから、都市計画専門家、市民、地方政府による参加型都市計画にもとづく「快適な暮らしが成り立つ街づくり」という都市形成イメージへの転換にとって決定的な契機となった、と述懐されています。その際の研究成果として、①D. M. スミス『工業立地論（上）（下）』（共訳、大明堂、1982・1984年）、②A. W. エヴァンス『都市の立地と経済』（共訳、大明堂、1986年）が挙げられます。

また、③『都市と経済立地』（大明堂、1991年）、④『地域・都市分析と経済立地論』（大明堂、1996年）等の著作をはじめ、⑤「経済立地複合体としての都市の研究」（専修大学経営研究所『専修経営研究年報』No. 4, 1980年）、⑥「日本の都市のもつ経済的機能の差の経験的研究」（『専修大学経済学論集』第19巻第2号、1985年）、⑦「大都市都心の再生」（専修大学社会科学研究所『社会科学年報』第21号、1987年）、⑧「地

域開発の効果と居住地の環境の選択」(『専修大学経済学論集』第27巻第2号, 1993年), ⑨「英国の『タウンプランニング』と日本の『都市計画』」(『専修大学社会科学研究所月報』第422号, 1998年), ⑩「まちづくりの日米英比較」(『専修大学社会科学研究所月報』No.585, 2012年)等々, 経済立地論の研究領域を中心に数多くの研究業績を発表されてきました。

以上のような研究活動とともに, 教育活動では, 「都市経済論」「地域経済論」の講義やゼミナール指導に尽力されてきました。講義では, 「経済立地」「都市計画」「土地利用」「土地課税」「道路交通」「都市・地域形成」「都市の持続可能性」「コミュニティ」「市民参加」「健康で文化的な都市における生活の質の向上」等々をキーワードとして, 「市場メカニズム」と「都市計画」との接点を経済学部 of 学生たちに考えさせる授業を展開されてきました。また, ゼミナールでは, 登戸東通り商店街が, 小田急線向ヶ丘遊園駅と登戸駅との間にある住宅密集地をめぐる土地区画整理事業やスーパー大型店の進出に伴って大きく変貌する中で, 「登戸東通り商店街ワクワクナイトバザール」に参加・協力され, ゼミ所属の学生たちが「まちづくり」のあり方を自ら考える機会を提供する試み等にも積極的に取り組まれてきました。

さらに学内行政上の役職として, 黒田教授は, 大学院経済学研究科長, セクシャルハラスメント防止委員会委員長, キャンパスハラスメント対策室長, 社会科学研究所事務局長等々を歴任されました。ご退職にあたっては, 「優れた同僚たちの支えがあったればこそ, 45年間もの長きにわたって勤務できたと思っています。有意義だった英国留学そして優れた恩師(江澤譲爾教授, A. W. エヴァンス教授)との出会いは, 私にとって忘れることのできない思い出です。また, 人間的成長を導いてくれたのも専修大学における同僚たちとの交流がもたらしてくれたものであることは間違いありません。専修大学が今後ともますます発展することを心から願っています」とのメッセージをいただきました。

最後に, 桃紅柳緑の季節, 本学を退職された後もくれぐれもご健康に留意され, 研

究に対する変わることのない横溢するエネルギーを発揮されるであろうことを願っております。そして、専修大学および経済学部の発展のために、折に触れてご協力いただけますようお願い申し上げます。以上、黒田彰三教授の古稀と定年でのご退職を心よりお祝いしつつ、これまで賜ったご指導への深謝の念をこめて私からの献辞といたします。

2017（平成29）年3月

専修大学経済学部長 内山 哲朗